

# 古文書を読む会学習記録

作成日 平成27年11月12日

開催日	平成27年11月12日	時 間	10:00～12:00
場 所	金沢公会堂	出席人数	13名
講 師	真田雅行氏	作成者	伊達 一雄
テーマ	永嶋家文書 ①		
概 要	<p>永嶋家文書の最終回として、3つの文書を読んだ。</p> <p>①入置申一札之事。文政元年 町屋村の祭礼で若者たちが酒を飲んで口論し、店の売物などを壊す事件があった。これに対し、被害の補償については相談して決めるので、遺恨に思わず理不尽なことをしないようにと当事者と名主らが泥亀新田の名主に出した詫び状。</p> <p>②古塩場小作議定證文之事 安政3年 塩場をめぐる金銭の貸し借りの返済について、当人と証人である塩場の惣代2人が永嶋段右衛門に出した證文。古塩場は平潟湾沿岸にあったと思われるが、場所は特定できない。</p> <p>③金沢領組合増之助合願書 天保14年 町屋村を始めとする寄場組合13ヶ村から勘定奉行に出された嘆願書である。内容は、13ヶ村は3,060石しかないのに、近来諸家の通行が多くなり御用を務めるのが大変である。更に異国船に備えて相模国御備場が出来て、継立場の人足、馬の確保が大変だ。加えて浦賀道、六浦道は山坂で余計に人馬が必要なので、組合村は困窮している。格別の御慈悲で「組合増村被 仰付被下置候様奉る願上候」(組合村を増やしてほしい)と訴えている。</p> <p>嘉永2年には13ヶ村惣代の町屋村名主と米倉家領分赤井村の名主から勘定奉行に嘆願書が出ている。この中で注目したいのは、継立場の人馬の需要増大について数字をあげていることである。それによると平均で安永天明の頃は1,220人位だったが、浦賀奉行が2人になってからは7,660人、今では寛政文化の頃に比べると1万6,821人も増えていると書いてある。この他陸路だけではなく、野嶋浦から横須賀村への渡船という仕事もあり金がかかる一方である。「最早此上金子借入手段尽果」と窮状を訴えている。</p> <p>幕末になると相模湾一帯は異国船に防備に追われ、保土谷からの金沢道、浦賀道の人馬の往来は飛躍的に増大した。その一方で輸送の経費増大のしわ寄せが沿道の村々に重くのしかかったことが明白だが、この嘆願書に幕府が真摯に対応した形跡はない。いつでもお上のやることで割を食うのは、一般庶民である。</p>		
次回予定	平成27年11月29日 10:00～12:00	於:金沢公会堂	越後人北前船漂流記 ②